
ファイアインザホール ～穴《アビス》では日常茶飯事だぜ！～

風来坊Q

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファイアインザホール ～穴では日常茶飯事だぜ！～
アビス

【Nコード】

N7630V

【作者名】

風来坊Q

【あらすじ】

誤って上官の足を撃ち抜いてしまった陸軍の新米兵士、レイ・アオイはその罰として十数年前からアメリカの中央に存在する巨大な『穴』に転属される事となる。金と暴力が支配するその無法地帯で突如出会った美人少佐の気まぐれにより、レイは僅か四人しかない彼女の部隊に配属される事となった。綺麗なお姉さん・筋肉馬鹿・家出少女・狙撃が嫌いなスナイパー……そして新たに平凡な日系アメリカ人で構成された奇妙な部隊。彼らは穴で何を求めるか？
アビス

00 穴に落ちた東洋人（アジア人）

ヘリコプターは深く深く下りていく。レイの気持ちはすでにどん底だったが。

注意が欠けていたと言うべきか、運が悪いと言うべきなのか。

数ヶ月前、戦闘車両の格納庫でレイ・アオイ二等兵は銃の整備を行っていた。もちろん、彼は安全の為にマガジンは取り外したが、ブートキャンプを出たばかりの新人だった故にセイフティーを忘れ、おまけに薬室には弾が入ったままだった。

そして銃は見事に暴発してしまい、たまたま通りかかった上官の足を貫通すると言った悲惨な結果を起す。

事故だったとしても罪は重く、レイは不名誉除隊プラス嚴重な罰を受ける事を覚悟していた。事故として認められなかったら反逆罪で極刑さえありうる。

だが、レイに下された判決はそれ以上に厳しいものだった。

——^{アレックス}地獄に行けと。

そしてヘリコプターは下り続ける。レイを果てしない闇へと誘うように。

01 穴の中では豚が神様

数十年前、アメリカには巨大な『穴』が出来た。

突然起った謎の地盤沈下により東西はカリフォルニア州からインディアナ州の間、南北はメキシコからノースダコタ州の間が丸を描くように残りの大陸から六キロほど沈んでしまった。

そこに住んでいた者達も当然の如く沈んで行き、ヘリコプターなくしては出る事すら出来なくなった。

つまり、一億人近くの間人間がアビスと呼ばれるその穴の底で暮らしている。

混乱に対応する為に中央政府はどんどん強くなったものの、それは新たな官僚制を生んだに過ぎず、今やアメリカは合衆国とは名ばかりの腐りきった政府と化していた。

臆病者と言う名の平和主義であるレイが軍に入らざる終えなかったのもアビス管理の為に兵力がより多く必要になり、徴兵制度が再開された故にである。

そして今は誰もが恐れる穴^{アビス}行きとなった。

後悔と嘆きを心の中で巡らせているうちにも、ヘリコプターは着々とヘリパッドに近づき始める。

そこはテキサス州にある陸軍の基地、フォートフッド。

レイは他の地獄送りになった兵士達と共にヘリコプターから降りると、一列になってヘリパッドを渡って落書きだらけの大きな国旗が飾られた建物を目指して歩く。

共に下りてきた数機のヘリコプターもそれぞれ着地し、中から兵士たちを送り出し始めた。どれもまるで戦争もののハリウッド映画で見かける強面でガタイ連中ばかり。故に彼は何かと恐怖を感じざる終えなかった。

目を合わせたら殺される事を恐れてレイは空を見上げると、そこには太陽が光っている。

レイは穴の底なので当然暗いのだろうと思っていたが、穴があまりにも広いせいか意外とそうでもなく、地上の昼間と変わらない明るさであった。心の高鳴りが留まらない彼にとって永遠の闇に閉ざされなくて済んだほんの少しの心休めになったかもしれない。

暴発事件の後、レイの処分は『第961歩兵旅団に転属』と言う事になった。

アメリカ陸軍第1軍所属の第961歩兵旅団はアビスの出現と共に急遽編成された旅団戦闘団の一つである。管轄はアビス南部であり、警察を持たないアビスにとって唯一の法の守護者と言っても良い。

最もアビスの危険性により死亡率は他のどこと比べもてずば抜けて高く、一度言ったら帰れないと言つまさに地獄そのもの。つまり自ら志願するものは殆どおらず、九割以上が他の配置で何かをやらした問題児で構成されている。

少ない荷物を担ぎ、自分の運命を恐れながら歩いていると、レイはガタイ男達と共にあつと言う間に建物に辿り着いた。

建物に入るとそこは巨大なホールであり、目の前には何人かの上官が立っていた。その中心には肥満体の中年男性がパイプ椅子にのさばりながらポテトチップスをだらしなく食べていた。

肥満体の男性はポテチを噛みながら隣に立っている仕官に喋る。

口を開く度にポテチの破片が飛び出し、いささか気持ち悪い。

「ざつと百二十人か。大した収穫じゃないな、こつちに回ってくる新鮮な血がどんどん少なくなってきたるように思えるのは俺だけか？ やつとけ」

隣に立っていた上官は頷くと、四列に並んだ兵士達を睨み、叫ぶ。
「Attention（気を付け）！」

レイは他の兵と共に一斉に両足の踵を付け、背筋を伸ばし、顎を高くする。

すると、肥満体の上官はダルそうにゆっくりと立ち上がり、やたらつるさい屁をこいてから適当な敬礼をする。

今や政府にとってアビスは必要なくなつたものを捨てる大きなゴミ箱である為、そのゴミ箱に配置された第962歩兵旅団の管理体制はゴミ同然にグチャグチャ、と聞いていたがそれほど酷いものなのだろうか。

「俺は第962歩兵旅団を仕切る、つまりアビス南部の全軍を仕切つてるストラット大佐。ここで一番偉いつて訳だ」

ストラット大佐はポテチの袋を放り捨て、こちらに向かって歩いてきた。

「どのくらい偉いかと言うと、神様に近いな」

どうやらこの人はかなり権力が頭にきているようだ。

「実際、この穴から自由に出入り出来るのは俺以外に三人だけ。そしてこの旅団でお前らをここから出してやれるのも俺だけだ」

大佐は汚らしい声でガハハと笑う。

アビスに住まう者は軍の許可無くしては出る事が出来ない。私用のヘリコプターやジェット機を持っていた人間もいたものの、アビスの周辺は軍が完全に方位しているので自力での脱出は不可能である。

アビスの人が声を上げてても政府には聞こえない。政府にとってそれは気にしなくて良いと言う意味であり、このような男にアビスの管理を任せても何の問題もないと言う事になる。

とは言えアビスでは何度も司令官の座を狙つてクーデターが頻繁に起こり、今や司令官の仕事はクーデターで排除される前に出来るだけ市民から金を盗んで地上へと逃げる1960年代の南ベトナムも顔負けの回転ドア方式のシステムになりあがっている。

「お前ら地上では地獄を免れる為に毎週日曜日に教会行つてたかもしれないけどなあ、もう必要ないぞ。すでに地獄にきちまったんだからな。俺の前に跪けば苦しすぎる思いはしなくて済む訳だ。いい話じゃねえか」

ストラット大佐は並ぶ兵士達を見つめながら唾を吐いた。

「もつとも、てめえらが教会に行くような連中じゃないって事は分

かつてるんだけどな。きちんとガキン時にサンデースクールで十戒を学んでたらこんな所に来るわけねえもんな」

大佐は自身の後に並ぶ上官達に振り返り、まるでパーティが始まるかのように両手を上げる。

「それじゃあ、諸君。好きな奴らを選べ」

上官達は次々と屈強そうな兵士から指名し、自らの前に並ばせた。アビスの軍はこうやって誰がどこに所属するかを決めているようだ。――まるで小学生がキックボールのチームを選んでもみたいじゃないか。

この状況はレイの記憶から嫌な物呼び覚ました。小学生の頃キックボールをやる度にレイは先生の命令でしぶしぶ仲間に入れられた自閉症のトミー君と共に最後まで選ばれなかった。それから両側のキャプテンが最後まで「いらねえよ」と譲り合ってからお互いレイとトミー君を泣く泣くチームに受け入れた。

不運な事にも小学生の頃の悪夢は再び舞い戻る事となる。

他の兵士達が全て選ばれた後、レイはたった一人広いホールの中で突っ立っていた。

仕方無い、とレイは思う。

この中で見るからに弱そうなのはレイだけであつた。別に極端に痩せてる訳ではないが、少なくとも他の連中とちがってマツチヨには見えず、176cm程度。18歳の東洋人としては平均だろうが他が6フィート越しばっかりの中ではとんだチビとしか言いようがない。

レイはふと自閉症のトミー君が羨ましくなった。知的障害者の彼は徴兵制度の対象外である故に。

「誰もこの東洋人^{アジア人}はいらねえのか?！」

ストラット大佐は一人取り残された俺を見つめてから回りの上官に怒鳴り声で尋ねる。返事は無し。

「しかたねえな、後片付けがめんどくさくなるけど――」

大佐は溜息を付くと、腰元のホルスターに掛かっている拳銃を抜

く。

——あ、あれ……何でそんな物を抜くのかな？

着地してからずっと続いていた心臓の高鳴りはさらに増す。レイは息が苦しくなった。

「おい、東洋人。名前はなんだ？」

完璧に近い角度で大佐に敬礼をすると、肺に残った僅かな空気を振り絞り、レイはなるべく勇ましく低い声で言う。

「れ、レイ・アオイ二等兵でありますう！」

……出てきたのはいつもより甲高く、小動物の命乞いにしか聞こえないような情けない声だった。

「そうか」

舌打ちをし、レイに拳銃を向ける大佐。

「お荷物はいらなんだよ」

外見だけでそれはあんまりじゃないか、とレイは心の中で叫ぶ。

彼は救いを求めて辺りを見回すが、他の兵士は全く興味を示さないか、おもしろ半分死に直面した情けない東洋人の姿を見つめ、ニヤついていた。

——僕の命はそんなに軽いものなんだ。くそっ……

あまりの悔しさにレイの目には涙が溢れてくる。それを見たストラット大佐は笑い出し、レイの胸倉を叩きながら言う。

「おいおい、泣いちゃってよ。ママのオッパイが恋しくなったか？残念。ここにいる連中の乳首は岩の如く硬いぞ」

周りにいた兵士達は一斉に笑い出す。その中でスキンヘッドの白人兵士がストラット大佐に言う。

「アンタのオッパイはそこいらの女よりでかくて柔らかそうだけだな！」

笑いは爆笑へと変わった。確かにストラット大佐は引き締まった体つきからは程と遠い肉体である。

ストラット大佐は頭に血筋が走っている。よほど肥満体の事を気にしていたらしい。

その途端、銃声が轟き、笑いが一瞬にして止まった。

レイは自分が撃たれたのかと体中を見回すが、痛みも傷跡もない。ストラット大佐の拳銃はレイの左へと向いており、その先には頭に風穴を開けられて倒れたスキンヘッドの兵士が。

「使い捨て（キャンフオーダー）の分際で一言余計だ」

大佐はそう吐き捨てると、両側で啞然となっている二人の兵士に銃を向ける。

「とつととその死体を捨てて来い」

急に臆病風に拭かれた二人の兵士達は強面に似合わぬ真つ青な顔でスキンヘッドの死体を引きずっていく。

「少し邪魔が入っちゃったが……それじゃあ、レイなんとか一等兵は敵前逃亡かなんかによる不名誉の戦死を遂げたって事にするか」
名誉の戦死すら与えてくれない心の狭さにレイは目に溜まった涙が零れそうになった。

大佐の指が拳銃のトリガーをゆっくりと抑える。

レイは自らの愚かさを悔やみ、あっけない終わりを悲しみ、心の中で家族や友人に別れを告げていると、再びホールに大きな音が轟いた。

ところがそれはレイが予想していた銃声ではなく、彼の真後ろにあるドアが乱暴に開けられる音だった。

それに反応するように大佐は拳銃を下ろし、舌打ちをした。

「あら、私に会うのが嬉しくないのかしら、大佐」

それは女性の声だった。レイは思わず振り返り、扉の方を見つめる。

そこに立っていたのは軍服を着た黒髪の若い女性。

スタイルは良く、かなりの美貌の持ち主であり、他の連中も彼女を見て静まりかえった。

自称神様の何様を黙らせる彼女は本物の女神様に違えない、と言う考えがレイの思考を過った。

するとストラット大佐は舌打ちをし、拳銃を下ろす。

「何の用だ、フォーレ少佐」

どうやら彼女は少佐らしい。ストラット大佐より階級は低い物の、彼にも一目置かれてる存在のようだ。

フォーレ少佐と言う名の美女は胸辺りまで届くロングヘアを揺らしながらホールに入ってくると、辺りを見回した。

「お姉さんも久しぶりに新人の取り合いに参加しようと思ったんだけど、どうやら少し遅れちゃったみたいね。まっ、また似たような顔ぶれだけど」

「ああ、残ったのはこのヘナチヨコ東洋人だけだ。役に立ちそうも無いから始末しようと思つてな」

「へえ」

するとフォーレ少佐はレイの前に立つ。身長はレイより二、三センチ高いだけだが、足はそれよりはるかに長いような気がした。

少佐は両手を腰にあてると彼の顔をジロジロと見つめる。

「見つけたわ！」

何をですか、と思つたのののあまりにも近い女神の顔に呆氣に取られ、レイは息すらままなかった。

ストラット大佐は唾を吐きながらフォーレ少佐に言う。

「ケツの穴は足りてるんだ。そう言う趣味の奴は少ないからな」

するとフォーレ少佐はレイの背中をポンツ、と叩き、大佐に宣言した。

「じゃあ私が貰うわね」

「けっ、好きにしろ」

ストラット大佐は拳銃をホルスターに戻すと、再びパイプ椅子に戻って座る。

「じゃあ、行きましょっか」

レイはフォーレ少佐の言葉が自分に向けられている事に気付いた。
——こんな地獄の中でも僕に救いの手を差し伸べる本当に女神かもしれない。

自分の考えが何かとオーバーだと言う事は分かっていたが、それ

でも今までこれほどの絶望に直面した事が無かったレイはそれほどの感動を心で感じるしかなかった。

「どうしたの？ 来るんでしょ」

少佐の雅な後姿に釘付けになっていたレイは振り返る彼女の言葉と共に何とか自分の意識を引き戻す。

「は、はいっ！」

レイは敬礼すると、自分の荷物を拾い上げ、急いで美しき上官の後を追った。

02 穴の中で交わる鉛と拳

基地の駐車場まで歩くと、フォーレ少佐は近くに止まっていたボロボロのジープに乗り込み、助手席の埃を軽く叩く。

「さっ、乗って」

「はいっ」

荷物をジープの後部座席に載せ、硬い動作で乗り込むレイを見つめながらフォーレ少佐はクスツと笑った。

「そんな力まなくてもいいのよ」

「はい……」

レイは助手席に座り、シートベルトをしようとした瞬間、ジープは突然走り出す。

「で、君の名前はなんなの？」

必死にシートベルトを見つけようとしながら僕は答えた。

「レイ・アオイ二等兵です」

やっとシートベルトをしめる事に成功した僕は姿勢良く座る。

「そっか。名前からして中国人……じゃなくて日本人かな？」
チャイニーズ ジャパニーズ

「はい、ニセイです」

レイの両親は二人とも日本育ちの日本人だったが、父親が仕事でアメリカに転勤し、住み着いた為、レイは生まれも育ちもアメリカである。所謂日系二世。

中学生の頃までは毎年のように日本の実家の家族に会いに行っていた上、家庭では両親が日本語を使うように心がけ、おまけにネットでしょっちゅう日本のアニメを見てたが為に日本語はそれなりに話せる。読み書きはもってのほかだが。

『レイ』と言う名前も親が「日本語でも英語でも使える名前」と言う事でつけたらしい。英語だと『Ray Aoi』で日本語だと『青井伶』。

暴風と割れたアスファルトから巻き上げられる砂埃が顔にぶつか

る中、レイは自分の事情を色々と言わずに説明すると、彼女は面白そうに聞きながら尋ねる。

「じゃあさ、やっぱりカラテとかやる？」

アメリカ人お得意のステレオタイプینگが発動した。レイは何度その質問を聞かれたか覚えていないほどである。

「まあ、似たような……琉球古武術をやってみました」

教えを広める為に何十年前にも前に渡米したとある武道家の道場が近くにあったので伝統的な事をやりながら体を鍛えると言う理由で父親に入れられ、気付いたころには二段の資格を受容していた。

「リューキューコブジュツ？ 何か強そうな名前ね」

確かにレイは小柄な体と素早い動きのおかげで組み手では負けた事が殆ど無かった。もっとも、レイ本人はケンカなどした事もないので実戦でどうなるかはつきりとは分からないが。

レイは琉球古武術について軽くフォーレ少佐に説明した。

「そつか……面白そうね。あつ、そうだ。これからレイ君は曹長ね」「はっ？」

突然の昇格にレイは驚きを隠せなかった。

「うれしくないの？」

まるでレイが飛び上がった大喜びする事を予想していたのか、少佐はレイの反応を見てキョトンとしていた。

「い、いいえ、ありがとうございます……いたっ、目に何か入った」——とは言え、そんなに簡単に人を昇格してもいいのかな？

レイはアビスに来て以来、ありとあらゆる常識が吹っ飛んでいつている気がしていたが、もはや満更でもないだろう。

「私はフレッセ・フォーレ少佐。フレッセお姉さんって呼んで良いわよ。ちなみに名前はフランス語。フランスの事なんて全然知らないけどね」

呼びたいと思う心が無かったわけではなかった。しかし、上官をお姉さん呼ばわりはまずいだらうと思ひ、レイは自重した。

フォーレ少佐は通り地平線を眺めながら喋り続ける。

「でも、そこがアメリカの良いところよね。フランス人だろうが日本人だろうがここに住んでればアメリカ人だから。色んな所から来る人が全部混ざってゴツチャゴチャのグツチャグチャになってさ、楽しいじゃん」

そしてその『ゴツチャゴチャのグツチャグチャ』が吐き出した汚物がこの穴に溜まる。少なくともここは全然良いところではないとレイは確信していた。

「まっ、ここは人を選ぶかもしれないけど」

人を選ぶってレベルじゃありませんよ、とレイは心の中でつつこむと、隣に座る柔らかな表情の美人に尋ねた。

「あの、フォーレ少佐……」

少佐はその言葉に反応するようにため息を吐き、肩を落とす。

「結局呼んでくれないのね、お姉さんへこんじゃう」

美人を凹ませるとは男として最低かもしれないが、それでもレイは自分が一人の兵士だと言う確信は捨てたくなかった。地上での軍による厳しすぎる秩序も今では懐かしく、恋しい。

「申し訳ありません」

すると、少佐はレイの背中を叩いた。

「冗談よ。あんまり硬いと長生きできないぞっ」

少佐はレイに可愛げな笑顔を向ける。それはあまりにも眩しかった。

「でも、あの豚野郎もひどいわね。こんなに真面目な子を殺そうとするなんて。間に合って良かったわ、運命って奇妙なもの」

レイはとりあえず頷いた。その間にも彼と少佐を乗せたジープは猛スピードでフォートフッドを離れ、隣にあるクリーンの街を抜けていく。

地盤沈下以前は栄えていたのだろうが、今のそこはひたすら荒れ果てていた。

「ひと気がないですね……」

太陽が明るく照らされる中、レイがそう呟くと、少佐はハンドル

から目を離さずに喋り始める。

「穴が出来たばかりの頃は少しは機能してたらしいけど、政府に見捨てられたと気付いて暴動が何度も起こった拳句、今はどの街もこんな感じよ。野党が怖いからね、大体の人間は軍の拠点がある周辺に密着して住み着くか、資源がある所に密着して自警団みたいなものを作って暮らすのが…… あつ、噂をすれば鬼みたいね、悪いけど後部座席にあるM4を二丁取ってくれる？」

「えっ、は、はあ」

レイは振り返り、後部座席に置いてあるアサルトライフルを手にとった。

《M4カービン》。アメリカ陸軍で多用されているアサルトライフルである。そのコンパクトなボディは市街戦で役立ち、レーザーサイトやグレネードランチャーなどのアクセサリーも豊富なので、汎用性が高い。この二丁は射撃を安定させる為のフォアグリップがついていた。

ただ、レイ自身M4で上官の足を撃ち抜いてしまったので少々トラウマではあったが。

「片方はレイくんのよ、準備してね」

「準備？」

するとフォーレ少佐は急にジープを止め、前方を指差す。

「野党よ」

その先には世界的に有名な安くて安心のアサルトライフル、《AK-47》を持った人相の悪い半裸の男性が四人ほど立っている。

向こうもこちらに気付いたようで、AKを構え、発砲を開始した。

——えっ、これってもしかして銃撃戦？

「伏せて！」

レイが自分のいる状況をイマイチ飲み込めず突っ立っていたところをフォーレ少佐は押さえつけ、頭上を目掛けて飛んでくる銃弾から救った。

ジープの影に隠れて敵の攻撃をやり過ごす中、フォーレ少佐はレ

イに笑顔で尋ねた。

「軍つてアビスじゃ結構嫌われてるのよ、知ってた？ 彼らがここから出れない理由が私達だからね、そりゃそうか。こっちはハイテクな武器やいい素材で出来た服を持つてる訳だから奴らにとっちゃ剥いだら得だし。この連中の武装は異常だけどね」

いや、知つて他も何もありえませんよ！ カオスですよこれカオス！ 見られた瞬間攻撃されるなんて秩序の欠片も無いじゃないですか！

……などと、言いたい事は色々あったが、結局レイは空しく口をパクパクさせながら彼女をボーっと見つめるザマになってしまった。

「まあこう言う所なのよ、アビスは。スリル満点でしょ」

フォーレ少佐は可愛らしくウインクすると、腰元の手榴弾を取り、安全ピンを抜いてから数秒後、ジープ越しに投げる。

「距離にもよるけど手榴弾は安全レバーを手放して二秒間ぐらい待った後に投げるのがオススメよ」

手榴弾の爆発が鼓膜を劈く中、激しく震えるレイを見つめながらフォーレ少佐は尋ねる。

「もしかして実戦は初めて？」

「は、はい」

するとフォーレ少佐は驚いた顔し、それからそんな彼を哀れむような優しい目で見つめた。

「そりゃ怖いはずね」

気付くと、少佐の手はレイの顔を掴み、柔らかい胸元へと押し込んでいた。

「あ、あの……少佐？」

レイは自分の状況をさらに飲み込めなくなった。このような場所でのこのような温もりを感じているとは、何が違和感があった。

「大丈夫、お姉さんが護つてあげるから」

——いや、そんな事より戦いの真っ最中でこんな事してて……で

も柔らかいし、いい匂いがするし……何だかどうでもよくなつてきた。

「でも、男の子なら少しは強く振舞わなきゃ駄目よ」

フォーレ少佐はレイを離すと、M4を構え、反撃を開始した。

惨めだった。女性に護られるなんて、男としてはずかしすぎる。

自分でも気付く前にレイは手に持ったM4のセイフティーを外しており、ジープから上半身を見せた。

向こうはフォーレ少佐の威嚇射撃によって建物の瓦礫の後に隠れている模様。

——だけど、顔は上げるはず。

レイはアイアンサイトを覗きながら敵が身を隠した瓦礫を見つけ、狙いを定める。

心臓の鼓動が止まらず、息苦しい。最悪の気分だった。

そして敵はついに頭を上げる。

「食らえ！」

思わずレイはそう叫び、構えたM4の引き金を絞ろうとする。

次の瞬間、敵の喉下に穴が開き、彼は血を噴出しながら倒れた。

だが、レイはまだ撃っていない。

彼は戸惑いを隠せずに隣にいるフォーレ少佐を見つめた。

「残念、レイ君が遅いから私が始末しちゃった」

テヘッ、と言わんばかりの表情で少佐はレイに言う。

その間にももう三人の野党は近くの建物に駆け込んで言った。

「あの中が本拠なのかしら」

すると一回の窓から一人の野党が大きな筒のような物を担いで姿を現した。

「あれは……」

野党が持っているのは紛れも無くロケットランチャーの有名どころ《RPG-7》。レイは再び恐怖で体が固まってしまった。

「避けて！」

フォーレ少佐の言葉と共にレイは右側に飛び、受身を取った。

RPGから発せられた弾は見事にジープを粉々に砕き、炎と煙が空高く舞い上がる。

「一体……どうなって……」

レイは爆発のショックで思考が回転していた。今だに自分が直面している現実が信じられない。

上官に撃たれそうになって、美人な少佐に救って貰ったと思ったらいきなり曹長になってそのまま実戦突入でRPGをぶっ放されて……

だが、回転が収まった頃には一つだけ理解した。戦わなければ死んでしまうと言う事を。

レイは敵の射撃から逃れる為に一直線で近くの瓦礫に向かって走ると、その影に飛び込む。

その間にもフォーレ少佐はレイに気を取られていた二人の野党を始末したようであり、残りはRPGを持っていた一人となった。

これなら楽勝……とレイがほっと胸を撫で下ろした時、最後の野党はどこからともなく取り出した汎用機関銃を窓ふちに載せ、少佐に向かって撃ち始める。

重い銃声の中、瓦礫の影に隠れていたレイは自分の状況を確認する。

フォーレ少佐は機関銃の容赦なき連射に押さえつけられ、隠れている壁の後から身動きが取れない。

——だけど、敵の意識は少佐に集中されている。

レイは覚悟を決めると、機関銃の死角である方向から建物に向かって走る。

建物の入口に身を潜め、数メートル先に相変わらず機関銃を乱射している野党を確認。

M4をゆつくりと構え、アイアンサイトを覗く。そこには敵の頭上。

レイは大きく息を吸うと、引き金に巻いた左手の人差し指を思いっきり押さえた。

耳元の爆音と共にレイのアサルトライフルから何発もの銃弾が繰り出される。

しかし締め付ける力が弱かったのか、反動でM4の銃身は大きく飛び上がり、野党の真上の天井にいくつもの穴を開けるのみの結果となった。

「なにい！」

野党はレイの存在に気付き、彼に機関銃を向ける。

平常心を完全に失ってしまったレイは思いつきM4を敵に投げつけた。

こちらは見事に野党の顔面に命中し、衝撃で銃身がぶれた為に敵が機関銃から放った弾丸はあさつての方向へと飛んでいく。

「銃が駄目でも……僕にはこれが！」

その隙を狙ってレイは野党に急接近すると、スライディングして自分よりは二周り大きい野党の膝を両足で挟み込み、前方に倒した。柔道で言う所の蟹挟である。

突然の攻撃に敵は受身を取る暇もなく思いつき地面に叩きつけられた。

レイは起き上がるとそのまま彼の上を取ろうとしたが、筋肉の塊である野党は思ったより早く起き上がり、鼻息の荒く恐ろしい顔をしながら機関銃のストック部分で彼に殴りかかる。

「てめええええ！」

——遅い。

すでに両足を肩幅まで開き、腰を落として戦闘態勢に入っていたレイは敵の攻撃を潜るように避けると、気合と共に腰の捻りをこめて左拳を思いつき野党の腹に叩き込む。

そして怯んだ野党の足を払って地面に叩きつけ、今度は倒れた敵の顔面に正拳突き。

「エエイツ！」

何かが碎ける音と共に、野党は鼻から大量の血を噴き出し、動かなくなった。

「勝った……の？」

敵は完全に気絶しているようだ。

レイは返り血のついた自分の拳を見つめながら息を落ち着かせようとする。

こんな戦いに巻き込まれた事自体が信じがたかったが、これはさらに夢だとは思えない。

倒れた巨漢に目を向け、レイはふと父親に教わった日本のことわざを思い出した。

「窮鼠猫を囓む……こう言う事なのかな？」

体が急に重くなった。彼を駆り立てていたアドレナリンが効力を失ったに違えない。

「つかれた……」

「大丈夫?! レイ君」

振り向くと、こちらに向かつてフォーレ少佐が走ってきていた。

彼女の心配の声は何とも聞き心地が良い。

フォーレは鼻血を流しながら倒れている野党を見つめながら驚いた顔をした。

「すっごい、素手でやっちゃったの？」

「はい、一応——」

すると再びフォーレ少佐の腕がレイの体を取り囲む。

「やれば出来るじゃない!」

気が付くとレイは再び彼女に抱きしめられていた。

「さすが私の見込んだだけの事はあったわ。そのリユーなんとかは伊達じゃないわね、立派だぞっ」

優しい声でそう語りかけられた。顔を彼女の胸に埋められたまま頭を撫でられるうちに、柔らかさと香ばしい香りによってレイは眠気にそそられ始める。

「ちよつと……休みます」

「えっ、あれっ、レイ君？」

レイの視界は真っ白になった。

03 穴の中の毒蛇（ヴァイパー）

目を覚ますと、揺れる車体の中、レイは柔らかいなにかに頭を乗せて寝ていた。

「起きたんだ。もうすぐ私達の基地よ」

真上にはハンドルを握るフォーレ少佐の姿。乗っているのはあの時粉々に吹き飛んだジープ……ではなく、屋根が剥ぎ取られた中型のピックアップトラックだった。

「えっ……！」

レイは慌てて起き上がる。

「別にまだお姉さんの膝枕を使っても良かったのに」

「あの……一体……」

「今乗ってるこれは倒した野党たちからもらっちゃった。魔改造してあるから中々スピードが出るわよ」

物恥ずかしさ故に顔が真っ赤になる。まさか上官の膝の上で寝ていたとは。

「もうしわけありません……」

「初めての戦いだっただから消耗しちゃったんでしょ、謝らなくて大丈夫…… あっ、よだれよ」

フォーレ少佐は片手でハンドルを握ったままもう片手の袖でレイの口を拭いた。

「ご、ごめんなさい！」

レイはフォーレ少佐の手から離れる。

「あら、私のほうこそゴメンね。ずっとレイ君を子ども扱いしちゃって」

「そ、そんな」

恥ずかしかったが嫌ではなかった。それがレイの本音。

そんな自分が物凄く情けなく感じるのもまた事実だったが。

「もう十八歳なのに僕のほうこそこんなに甘えて……」

「お姉さんより五年も年下なのね、若つかいな」

少佐が僅か五歳しか年上でない事にレイは驚きを隠せなかった。彼女が老けて見えた訳ではなく、二十三歳で少佐と言う言……そうでもなかった、何せレイも一瞬で二等兵から軍曹に昇格したので、もはやアビスでは階級に意味など無いはず。

レイを驚かせていたのは彼女の大人びた雰囲気である。母性的な優しさを持ちながら、何事にも冷静に対処する……とても年相応のものではない。

「あと、ジープに乗せてあったレイくんの荷物、何とか大丈夫みたいだったから、足元に置いといたわ」

レイは少し焦げた軍用サックを見つめながらお礼を言う。

「ありがとうございます……」

「そろそろ家よ、見てごらん」

フォーレ少佐が指差す看板をレイは見つめた。

錆に塗れて不自然な角度に湾曲する看板には『Welcome to Waco』と今にも剥がれ落ちそうな白い字で書かれている。「ウェーコって言う名前の街なんですか？」

「そつ、ここが私達の、そして今日から君のホームタウンよ」

「あの……ホームタウンって変わらないものじゃないでしょうか」

「そう言う指摘が出来る元気があれば大丈夫ね」

ウェーコの町並みはキリーン同様に廃墟ばかりだが、所々にボロボロを纏った人たちが見える。少しは活性化しているようだ。

剥がれたアスファルトの道を何度か曲がり、ピックアップトラックは停止する。

「はい、ここが私たちの基地。そしてレイくんの新しい家よ」

そこには廃れた一軒の酒場がある。入り口の真上には本来店の名前が書いてあったであろう看板に黒いペンキで『Faur? Squad』と書かれている。

「バーに見えるんですけど」

「だけど私の率いるフォーレ分隊の本拠地よ」

得意げに言うフォーレ少佐の言葉に、レイは違和感を覚えられずにはいらなかった。

「でも、分隊って少佐じゃなくて伍長か軍曹が率いるものじゃ……」
「私は中隊なんて人が百人以上もいるもの嫌だったのよ。個人的関係が生まれないしさ。そもそもここじゃ階級なんて殆ど意味を成さないものだからね。私だってストラット大佐がアビスの大將になるのを手伝ったから飛び級で伍長から少佐まで昇格されたもん。と言うか私がいなければあのクーデターは不可能だったからね」

それ故にストラット大佐は彼女に頭が上がらないようだ。

——じゃあ僕の昇格も殆ど意味が無いって事になるよね。

するとフォーレ少佐は顎をトラックのハンドルに乗せ、不満そうに言う。

「ここの支配者になる以前はあんな豚じゃなかったのよ、ストラットも。力ってやっぱり人の本性を露にさせちゃうものよね」

フォーレ少佐は軽いため息を吐くと、すぐに元気の良い笑顔に戻った。

「まっ、ともかく行きましょ」

「はい」

先に降りた少佐に続き、レイは荷物と銃器を背中に背負うとトラックから降り、目の前の建物へと歩いていく。

「ところでこの配下の何分隊なんですか、ここ？」

「忘れちゃった」

てへっ、と言わんばかりに返答するフォーレ少佐。

忘れていいものじゃないような気が……などとレイは思ったが、どうやらここでは忘れても大した問題はないらしい。

フォーレ少佐は扉を大きく開きながら、

「ただいま！」

と元気良く建物に乗り込む。

中は様々なアルコール飲料が並ぶ棚、その手前にクッションから綿がはみ出るスツールが並んだ木製のカウンター、そしていくつか

のテーブルと椅子が置かれている……どこからどう見ても酒場な場所であった。

「おかえり、姉さん」

スツールに座りながらカウンターの奥に位置されているテレビを見つめていた者から高めの声が聞こえてきた。

「新しい子見つけてきたわよ」

「なんだって？」

口にタバコを銜えた十四、五歳ほどの少年はスツールでくるりと回り、こちらを向く。

その少年は……いや少年かどうかすらレイは分からなかった。髪型は首の根元まで届くバサバサした男性で言うロングヘアー、女性で言うショートヘアーだった。しかし、顔立ちは先っぽがツリ上がった大きな瞳に、小さな鼻と唇と言う妙に小奇麗なものであり、とりあえずキツめの美少女としても通りそうな容貌。背丈はレイよりも低い162センチほど。

服装は橙色のカーゴパンツに黒い半そでのアンダーシャツ。胸部は殆ど起伏が無く、腰にも括れはないのでやはり男……いや、貧相な体系の少女と言う可能性も――

「あつ、ヴァイパーくん！ タバコは吸っちゃいけないっていつてるでしょ！」

レイが必死に悩んでいる間にもフォーレ少佐は少年のタバコを口から抜き取り、扉から外へと投げ捨てる。

とりあえず美少女はタバコを吸ったりはしないだろうと言うナイーブな考えに基づいて、レイはフォーレ少佐が『ヴァイパーくん』と呼ぶ少年は男であると判断した。

「あつ、何すんだよ！ 別にいいじゃねえか！」

フォーレ少佐の行為に抗議をする少年。

「だめよ、こんな若いうちにタバコなんて吸っちゃってヴァイパーくん不良になっちゃうわよ」

「こんな所で不良もクソもあるか！」

さすがにレイもそこはヴァイパーと言う名の少年に同意せざるをえなかった。

「ヴァイパーにはタバコを吸わせちゃダメってボルフに言ったはずなのに……ボルフ、ちょっと降りてきて」

フォーレ少佐は二階へと続く階段のほうへそう呼びかけるが、返事はない。

「ボルフの野郎は買出し行ってるよ。でっ、コイツが新入りなのか？」

ヴァイパーは目を凝らせながらレイを見つめる。

「そう、レイ・アオイくんって言うの。可愛いでしょ」

レイの頬を優しく引っぱりながら笑顔で言う少佐。何かが間違っている。

「弱そうだな。勉強しか出来ねえアジアンの顔してやがる」

いきなり少年より容赦ない暴言。もっともレイは確かにそう言う外見なので、反論しようがない。仮に強そうな面構えだったら豚大佐に殺されそうにならなかっただろう。

「ところがどっこい、レイくんはカラテ・マスターなの。ねっ、レイくん」

——ちよつと違うんだけど……

「へえ——」

刹那、何の前触れも無く少年の拳が飛んできた。

「っ！」

レイは間一髪所の所、左手で少年の拳の軌道を逸らし、相手から距離を取って構える。

「なるほど、反射神経は悪くねえな」

——無茶苦茶だ。

心の中でレイはそう愚痴を零した。

「ごめんね、これはヴァイパーくん。この分隊の狙撃手スナイパーなの。ちよつと荒い所もあるけど本当はいい子だから、大目に見てあげて」

「はあ……」

「誰が良い子だよ」

「反抗期だから気にしないでね」

「うるせえ！……姉さんのバカ」

ヴァイパーは何故か可愛くも見えてしまう不機嫌な顔をした。フォーレ少佐はそんなヴァイパーの頭を撫でながら笑顔で「ごめんごめん」と言う。

すると突然、カウンターに置かれている無線機のようなものが鳴り出した。

「えっ、もしかしてもう呼び出し？」

少佐は無線機に駆け寄り、ハンドマイクを口に当てて通信ボタンを押す。

「はい、こちらフォーレ分隊」

『バレーミルズの武器庫だ、何者かの襲撃を受けている！ 応援を要求する！』

無線機のスピーカーから聞こえる声が酒場に響き渡った。

「分かった、すぐ行くわ」

フォーレ少佐はハンドマイクを無線機に戻すと、再びレイに顔を向ける。

「ごめんね、いきなりなんだけど出勤命令受けちゃった」

その一言にレイは肩を落とさずにはいらなかった。再びいつ命を奪われるか分からない状況に身を置かなければならないとは。

もつとも、それが兵士の仕事であるので、文句は言えないが。

それに対してヴァイパーは待ってましたと言わんばかりか嬉しそうな表情であり、すぐさまカウンターを飛び越えてその後ろにある巨大な狙撃銃を取り出す。

フレームからして対物ライフルの《バレットM82》だろう。

「久しぶりに楽しくなるな！」

「ダメよ、ヴァイパーくん。武器庫でそんな大口径なもの使っちゃ危険でしょ。弾薬に当たって連鎖爆発したらどうするの。《M24》を使いなさい」

「ええ、だつてよ——」

「だつてじゃありません」

腰に手を当てるフォーレ少佐に圧されたのか、ヴァイパーは口をへの字にし、バレットM82を戻し、M24が入っていると思われるハードケースを取り出す。

「ちえっ……こんな小さいのじゃつまんねえのに」

「もう、戦争は遊びじゃないんだから」

この会話にレイは非常に違和感を覚えた。まるでケーキをねだっているのにクッキーで我慢しなさい、と言う姉と妹もしくは母と子のやり取りに見えたのだ。

「だからオレは狙撃が嫌いなんだよ。隠れてチマチマと撃つなんて生に合わねえたらありやしねえ」

そう愚痴を零しながらヴァイパーは建物を裏口から出て行き、フォーレ少佐は周りの戸締りを確認すると、裏口へと足を運んだ。

「さっ、行きましょレイくん」

「あっ、はい！」

裏口から出た所には一台のハンヴィーが止まっていた。

「必要な装備はもうこれに積んであるから」

そう言いながら少佐は運転席に乗り込み、助手席はヴァイパーに取られていたので、レイは後部座席に座る。

ハンヴィーは猛スピードで発進した。

04 穴にはテロリストと超人（エスパー）が？

04

荒野の一本道を走りながらレイは高鳴る心臓を押さえる為に外の景色を眺めていた。再び殺し合いをやらなければならないと言うのはどうも腑に落ちない。

助手席で誰かと通信を行っていたヴァイパーはハンドマイクをハンヴィーに装着された無線機に戻し、運転中のフォーレ少佐に言う。
「ボルフも連絡を貰ったって。現場で落ち合うらしいぜ」

「了解。あつ、レイくん、ボルフってのはうちの重火器専門よ」
（ヒールームズ・エクスパート）

レイはふと思った事を口にする。

「この分隊の構成員は何人なんですか？」

「レイくんを含めて五人。家族には丁度いい大きさだとお姉さんは思ってるわ」

「家族？」

「気にしないで、こつちの話」

バックミラー越しに少佐の笑顔が見える。それはこの穴の中で唯一優しいものだろうとレイは思った。

何もない荒野を走り続けて約二十分、三人はバレーミルズにたどり着いた。

武器庫の少し上にある丘にはすでにもう一台のハンヴィーが止まっており、その隣には双眼鏡で武器庫を偵察する男の姿がある。

その男は軽く二メートルを越した三十代前半の巨漢であり、着ていたタンクトップから露出する筋肉はボディビルダーも顔負けのものであった。まるで手に持った双眼鏡がおもちゃのように見える。

巨漢は振り返り、三人の乗るハンヴィーに向かって歩いてくる。
フォーレ少佐はハンヴィーのエンジンを止めて車から降り、続く

ようにレイとヴァイパーも出た。

「先を越されちゃったわね、ボルフ」

「おう……って見かけないのがいるな」

「そうそう、レイ・アオイくんって言うの！」

レイを自己紹介するたびにフォーレ少佐はやたら嬉しそうになる。存在を喜ばれている事はあるがたく思ふべきだろうが。

「ビクター・ボルフバークだ。ボルフって呼んでくれ」

大きい右手を差し出すボルフ。押しつぶされるような握力を感じながらレイは握手をした。

「レイくんはジャパニーズでカラテ・マスターなのよ」

誇らしげに言うフォーレ少佐。もはやレイがやっているのは空手と少し違うと言う事実は関係ないらしい。

するとボルフは身を屈めながらレイを見つめた。

「ジャパニーズか……知ってるぜ、ワラの家に住んでキムチとか言うのを食う連中だろ？」

偏見丸出しの一言。たぶん人種的多様性が少ない中西部育ちだろう。言葉に悪意は感じられないが、その無知さにレイは呆れる。

「全然違います」

するとボルフの肩まですら届かない背丈のヴァイパーが彼を叩きながら言う。

「バカ、そりゃチャイニーズだろ」

「ちげえよ、お前チャイニーズって言ったら海賊品だろ」

「食べ物話してんだよバーカ」

「んだと、じゃあお前はキムチがチャイニーズだって事に命掛けろよ」

「ああん？ だったらてめえはキムチがどこの国のもんだって言うんだよ」

教えてあげようとも思ったが、この二人の程度の低い争いにはどうにも加わる気になれず、レイは呟く。

「日本は……ほら、スシとか」

それを聞いたバカ二人は閃いたように目を丸くする。

「スシか！　そうかジャパニーズはワラの家に住んでスシを食ってるんだな」

——だからワラの家からはなれようよ。

「いつもあれ疑問だったんだよな、何でジャパニーズは魚が焼けるのを待てない程せっかちなんだろうって。だって生で食っちゃうんだろ」

「いや、そういう理由じゃ……」

「はいはい、三人ともそこまで。任務があるのよ」

フォーレ少佐は手を叩きながらあまりにもふざけた会話に終止符を打つ。

「戦闘準備してね」

やたらチャーミングなウイंकをすると、少佐はハンヴィーのトランク部分を開ける。

ヴァイパーはしぶしぶと狙撃銃のM24が入ったハードケースを取り出し、銃を組み立て始める。

トランクの中にはM4カービン三丁に拳銃の《ベレッタM9》、そして手榴弾。その他に使い捨て対戦車ロケット弾の《M72 LAW》が二本。

半世紀以上前から米軍に運用されているLAWは現在使われている戦車にダメージを与える分には威力が足りないが、持ち運びが簡単かつ安価である為に、現在も対軽車両や建物用に使われている。

寧ろ戦車に乗った敵がいるわけのないアビスでは、後継種の《SMAW》ロケットランチャーより、こちらが重宝されるだろうとレイは思った。

「さあ、ちゃちゃっと武装武装！」

レイはホルスターを付けたり手榴弾を装備したり戦闘防弾チョッキを着たりする間、ある事に気付いた。いや、そもそも敵陣についてから武装と言う事自体おかしいのだが。

「あの……ヘルメットは？」

「誰も使ってくれないから闇市で売ったわ」

「はあ？」

「防弾チョッキも私のとレイくんが着ているの以外売ったわよ」

「ど、どうして……」

「銃弾や爆風なんて避ければ当たらないでしょ」

もつともな発言だったが、それが避けられる人間がどれほどこの世に存在するかレイは尋ねたかった。

「本当はそれはサミーのなんだけどね」

「サミー？」

「この分隊のもう一人の子。メディック衛生兵なんだけど、ヴァイパーとは違う意味で反抗期でね、時々プチ家出しちゃうから作戦に参加する事が少ないの。今回もこないだろうし」

——いや、兵士が家出つて……それはAWOLと言っくんじゃ……

レイは重いため息を吐くと、M4カービンを手に取り、すでに武装を終えたヴァイパーとボルフの所へ歩いていった。

「さっき双眼鏡で見てただけだよ。手遅れみたいだったぜ、完全に敵に占拠されてやる」

ボルフは軽々と肩に《M240機関銃》を載せながらそう言った。
「私達が救援要請を受けてから三十分程度……元々ここは守りが薄かったから仕方ないわね」

「まあ、今は武器庫を取り返すまでだろ」

ボルフはポケットからタバコとライターを取り出し、火を点す。
それで何かを思い出したかのようにフォーレはボルフを睨んだ。

「そう言えば、帰ったときにヴァイパーがタバコを吸ってたんだけど——」

「俺はいなかったから知らないな」

「そうやって教育放棄するからヴァイパーくんがグレるの」

「あの……作戦のほうは……」

「あつ、そうだったわね。ヴァイパーくんはここで狙撃。三分後にあそこの監視塔で見張ってる奴を撃ち抜いて。そしたら私達三人が

一斉攻撃するから。それからは適当に援護射撃よろしく」

「へいへい」

ヴァイパーはそう言うのと、組み立て終えたM24の脚を広げ、匍匐状態になる。

「よし、それじゃあ行きましょ！」

フォーレ少佐に続き、レイとボルフは敵に見つからないようにと丘の斜面を滑り降りていく。

斜面が平地に変わると、ボルフは左側の岩、レイと少佐は右側にある大きな岩に隠れる。

岩の陰から少し視線を覗かせながらフォーレ少佐は言った

「この武器庫は全部で三つ倉庫があるの。まずは目の前のこれから制圧するわ。それから北側の倉庫を襲撃、最後に西側よ」

「了解」

レイとボルフは同時に言う。あとはヴァイパーが狙撃によって開戦の合図を上げるのみ。

——落ち着け、冷静にいれば死にはしないんだ。

緊張のあまり吐き気を催す中、レイは意識を集中させようとする。

「そろそろね、準備して」

もうすぐでヴァイパーの狙撃が来るらしい。

レイはM4を強く握り締め息を呑む。

「FIRE IN THE HOLE!!」

丘のほうからヴァイパーの叫び声が聞こえる。狙撃手が自分の居場所バラしてどうするの、とレイが心内でつつこんだ次の瞬間——バシユ、と言う音と共にライフル弾ではなく一本のロケットが空を切って監視塔に激突した。

——そ、狙撃じゃない?!

轟く爆音。レイは何が起こっているのかさっぱり分らない。

火だるまになった監視塔は倒れ、目の前の倉庫に崩れ落ちる。そして倉庫の中の弾薬が燃える監視塔に引火したのか、大爆発が起こり、第一倉庫が跡形もなく吹き飛んだ。

「……」

唖然とするレイ。その間にも珍しく焦りを見せたフォーレ少佐が通信用のイヤピースに喋りこむ。

「ちょ、何してるのよヴァイパーくん！ お姉さんは狙撃しなさいと——」

『狙って撃つたんだから狙撃だろ』

分隊回線にしてある為、ヴァイパーの愚痴がレイのイヤピースにも聞こえてくる。滅茶苦茶な理論だ。

「LAWを使うのは狙撃じゃありません！」

『このほうが手っ取り早かったじゃねえか』

「あの倉庫は味方の武器が沢山入ってたのよ……お姉さんクビになっちゃう」

「とは言え、こうなつた以上仕方ねえな」

ボルフの言葉に少佐は仕方なく頷く。

「そうね、帰ったらヴァイパーくんはお仕置きだけど、行きましょ！」

二人は同時に岩の陰から飛び出し、混乱する敵に発砲を開始した。一般市民的な服装の敵達はやはり戦闘経験が浅かったのか、ボルフとフォーレ少佐の無駄の無い攻撃に次々と倒れていく。

二人の後に続くレイはいまだに一発も銃弾を撃たなくて済んでいく程だった。

オブジェクティブ

敵のAKによる銃撃を掻い潜りながら次の目標である第二倉庫に向かう途中、敵の投げた手榴弾が転がり込み、それを避ける為にレイは受身を取らざるをえなかった。

だが、それは二人とレイの距離を遠ざけてしまい、少佐とボルフが第二倉庫に向かう中、レイは敵の銃撃に追われるように一番近くにあった第三倉庫に飛び込んでしまった。

『レイくん、大丈夫?!』

イヤピースにフォーレ少佐からの通信が入る。

「はい、何とか……第三倉庫に入っちゃったんですけど」

レイはイヤピースに喋りこみながらちよこっただけ顔を倉庫から出す。ここから第二倉庫までは百メートルほど。敵の攻撃を凌げる物陰は一切無い。

「多分そちらに向かうのは無理です」

体中に流れて込むアドレナリンで震えはいつの間にか収まった。『分かったわ、私達は第二倉庫の敵を始末してからそっちに向かうから、それまでそこで隠れてて』

「はい」

レイは弾薬が入った木箱の後ろに隠れると、倉庫内の敵を数える。

——一階に二人、二階のベランダに二人……四人が。

この武器庫はどれもトタン製のぼろい倉庫である上、弾薬の保存状態もあまり安全ではない。第一倉庫の爆発っぷりからレイはそれを理解していた。

おまけに火薬の臭いがする。発砲ただけで空気中の火薬に引火して爆発する恐れも否めない。

もちろん敵はこれを知っているだろう。つまり、倉庫内で敵が銃を使う可能性は低い。

接近戦なら自身があるが、素手では心もとないと思いながら辺りを見回すと、レイは壁に何本もの鉄パイプがある事に気付く。

その中からなるべく六尺に近いものを見つけると、M4カービンを地面に置き、鉄パイプを構える。

——アビスで生きていくなら、少佐に頼ってばかりられない。

出来る限りの事は、やる。

そう自身に念じ、レイは飛び出た。

「誰だ！」

目の前の敵が銃を構えるが、レイは敵が発砲を躊躇った隙を用いて、棒で籠手を叩いて銃器を落とさせると、首に突きを入れる。

——一人目！

続いて後ろから大きめのマチェツテを持った敵が迫ってきた。やはり銃器を使わない事にしたらしい。

レイは体を横に捌きながら棒を繰り上げて敵の顎に命中させると、怯んだ隙を狙ってみぞおちに突きを入れる。

——二人！

仲間達がやられたのに気付いたベランダの敵二人。片方はレイにナイフを投げつけた。

レイが受身を取ってナイフを避けると、マチェツテを持ってベランダから飛び降りてきた。

降りかかるマチェツテを回避し、横を取ったレイは、頭部への袈裟打ちで気絶させた。

最後の一人は逃走してしまったようなので、レイは入ってきた方向と反対側の扉に向かって歩く。

扉の影に隠れて外を覗くと、そこには一台の大型トラックと数人の男性、そして彼らに指示を出している一人の少女がいた。

「ほら、早くせんか！ 敵の増援が来てるんやで」

深い南部訛りの少女はレイと同じ年頃だった。片手にマシンプistolの《UZI》を持ったワイシャツとジーパン姿であり、長めのブロードヘアは三つ編みのツインテールに結ばれていた。中々可愛いものの、方言・服装・髪形に加えて青い瞳とそばかすのついた頬はいかにも典型的な南部州の少女だと思わせる。

「おまけにここの守りついたへボい連中と違って増援はホンモンみたいやしな」

レイは棒として使った鉄パイプを静かに壁に立てかけ、ホルスタ一の拳銃を抜き、扉を蹴り開けた。

「動くな！」

荷物をトラックに載せていた連中は全員固まるが、少女だけは肩眉を上げる。

「誰や、アンタ」

「銃器を置け！」

他の連中はおとなしく銃器を落とすが、少女は舌打ちをする。

「チンクの分際で——」

「僕は日本人だ、早く武器を置け！」

「イエローモンキーなんぞ全員同じや」

刹那、少女の後ろに透き通った男性の姿が見えた。

そして目の前にいたはずの少女の姿は消え、瞬き出来る前に後頭部に冷たい鉄の感触。

「死ねよや、サル」

レイは間一髪ので所で体を回転させて敵の銃撃を避けるが、同時にすぐ側で火を噴いたUZIはレイの鼓膜を傷つける。

「くっ！」

耳の痛みを堪えて敵を殴ろうとするが、再び少女は姿を消し、今度は頭上からドロップキックをかましてきた。

レイは体を捻ってかわすと、カウンターを行おうとするが、再び敵は一瞬にしてレイの背後を取る。

とりあえず敵がUZIを使えないように再び倉庫に駆け込むと、レイは再び鉄パイプを手に取り、来るべき敵に備える。

——まるで瞬間移動してるようじゃないか。

「そりゃしてるからや！」

またもや少女は目の前におり、ナイフで突きを放ってきた。

——人の考えが読めるのか？

突きを避けながら棒で籠手打ちを狙うが、再び瞬間移動された。数メートル離れた場所にいる少女は自信満々に頷く。

「瞬間移動にテレパシーだなんて、まるでエスパーじゃないか！」

「だとしたらどうするんや？」

——そんなものが現実にいる訳が……

「目の前におるっちゅってんのに」

一瞬の動揺に付け込まれ、レイのみぞおちに少女の拳が叩き込まれる。

ショックで呼吸困難に陥るレイの耳に、少女は呟いた。

「デイクシー・クラット。これからこの国を変える偉大な人の腹心や」

「テロリストが自慢だなんて——」

デイクシーと言う名の少女はレイを蹴り飛ばし、彼に向かって歩く。

「最初はただのチンクかと思ったんやが、アンタからはウチや親方は同じものを感じる。仲間にならへんか？ アビスから出られる事は保障するで」

——アビスから出られる……

レイはその言葉に壮絶な魅力を感じたものの、こいつらが言っている事が本当かどうかは分からない。それにここで命の恩人であるフォーレ少佐を裏切る訳には行かなかった。

「こ、断る」

「こんなにいとお誘いを断るとはやっぱりアジアンは脳みそがサルやな」

デイクシーは再びナイフを取り出し、起き上がろうとするレイに近づく。

必死に思考を巡らせるレイ。向こうは瞬間移動が出来、おまけにこちらの考えも筒抜けと言う圧倒的不利な状況……しかし、筒抜けと言う事は！

——とどけ、僕の思い！

レイが力強く思いを込めると同時に、デイクシーは急に真っ赤な顔になり、頭を抱えながら口をパクパクさせる。

「な、死に際に何考えとんやアホ！ ウチはそんな淫乱な女やない、絶対に胸にそんな物は挟んだりせんわ！ 違う、そっちは入れる穴ちやう、出す穴や！ 喘ぎ声なんて……」

その隙を狙ってレイは飛び上がると、彼女を地面に押さえつけた。

「へ、変態！ 卑怯者！」

「男の性なんだ。人の心を勝手に覗くから悪いんだよ」

「ファッキンアジアンは下劣で野蛮やな、サル！」

「ホワイト・トラッシュにしてはウブだね」

「サルがウチを侮辱して！ 離せチンク！」

どうやら他人に接触されている間は瞬間移動が出来ないらしい。
このままどうにか気絶させられれば……とレイが考えていると、
彼の後ろに迫る気配を感じた。

——あの時逃げたと思っていた敵……戻ってきたのか？

レイは後ろから迫る敵の攻撃を避ける為、ディクシーを離してしまい、彼女はレイから距離を取った。

敵は二人、おまけに片方はエスパー。絶体絶命か……

レイが齒を食いしばった時、どこからとも無くナイフが飛んできてレイを背後から襲った男の背中に突き刺さる。

「なんや?!」

「つたく、新入りが一人で突っ走るんじゃねえよ」

倉庫の入り口には小柄な少年、ヴァイパーが見えた。

「てめえが一人で倉庫に入って中々でてこねえから気になって狙撃なんざしてられねえだろ」

ヴァイパーは動かなくなった敵からナイフを抜くと、レイの隣に並んだ。

「残るはこのビッチだけなんだろう、とつとと殺っちまおうぜ」

「あ、ああ」

「誰がビッチや、クソガキ!」

「てめえだよ!」

ヴァイパーの素早い回し蹴りがディクシーの顔面に命中する。

——当たった?!

何とか両手で顔を守ったディクシーは転げると、すぐに起き上がり、ヴァイパーから距離を取った。

「な、何で飛べへんのや……まさかこのガキも?　しゃあない」

ディクシーはトラックのほうへと走りながら手榴弾をこちらに向かって投げる。

手榴弾は地面に当たると同時に煙幕を起こし、ディクシーと二人の間を遮った。

つかつに煙に入ったら抜けたときに狙い撃ちにされる。

「ちっ！」

ヴァイパーは煙の中へと拳銃で撃つが、ラッキーヒットは無かったようで、トラックが去っていくエンジン音が聞こえる。

煙が晴れたところにはトラックはすでに距離を取っており、ヴァイパーはタイヤを狙い撃ちしようとするも、敵の威嚇射撃によってうまく狙いが定められないまま、トラックを逃してしまふ。

「逃げやがったか」

ヴァイパーは舌打ちし、拳銃とナイフをホルスターに戻す。

「ありがとう、わざわざ助けに来てくれるなんて。助かったよ」

レイが笑顔で感謝を示すと、ヴァイパーは気まずい顔をしながらそっぽを向いた。

「う、うるせえ。お前が死んだら姉さんが悲しむだろうが……気に入られてるみてえだし」

照れる小柄な少年の姿は何かと可愛かったので、レイは彼の頭を手を載せてみる。

「きゃん！」

妙に女々しい色声を上げ、ヴァイパーは距離を取る。

「な、何すんだよてめえ！」

「いや、褒めてあげよう——」

「ガキ扱いするんじゃないやねえよ、こっちじゃオレが先輩なんだ！ それに——」

「それに」

「オレの頭を撫でていいのは……姉さんだけだ」

視線を逸らしながらさいごの言葉をぼそぼそと言うヴァイパー。

「ニヤニヤしてんじゃないやねえよ、ジャップはみんなロリコンなのか！」

「いや、僕は別に疚しい思いがあって……」

「おい。レイくん、ヴァイパーくん！」

振り返ると、倉庫の反対側の入り口に手を振るフォーレ少佐、そしてボルフが立っていた。

「少佐！」

レイとヴァイパーは急いで彼女の所へ駆け寄った。

「ごめんね、第二倉庫で思わずてこずっちゃって。でも、敵はみんな撤退したみたい……二人でやったの？ これ」

「殆どジャップがやったよ。オレは最後に一人殺っただけだ」

「ほお……」

すると反応する間もなく、フォーレ少佐がレイに飛びついてきた。
「すっごくいい、すごいよレイくん！ さすが私の見込んだカラテ・マスターね」

その呼び方は止めてください、と言いたかった所だが、花と火薬が混ざった絶妙な匂いと柔らかい少佐のぬくもりに引き寄せられ、

「あ、ありがとうございます」

としか言えなかった。

「それにしてもね、ヴァイパーくん」

フォーレ少佐はレイから身を離すと、ヴァイパーを咎めるような瞳で見つめた。

「ロケットランチャーはないでしょ、普通」

「だって……」

「だってじゃありません。一週間LAW使用禁止」

「なっ、あんまりじゃねえか」

口を開けたまま愕然とするヴァイパー。

「勝手に援護狙撃命令を無視して第三倉庫まで来ちゃった事は結果的にレイくんが助かったみたいだから見逃してあげてるのよ。本当なら夕食抜きにまでしちゃう所なんだから」

「チマチマと丘の上で狙撃ばかりさせられるオレの立場にもなれよ」

「ストラット大佐に説明しなきゃいけない私の立場にもなって。殆どの武器と弾薬を盗まれて、おまけに倉庫一個木っ端微塵に吹き飛ばしたなんて、彼かなり怒るわよ」

少佐は口を尖らせるヴァイパーの頭をコツンと拳で叩く。

「狙撃手なんでしょ、ヴァイパーくんは」

「オレ以外に務まるのがいねえからって……なあジャップ、狙撃手やらねえか？」

正直前線から離れて安全な場所で攻撃出来るのはうらやましかったが、残念な事にレイは狙撃の技術を持ち合わせていない。

「ごめん」

「なんだよ、役にたたねえな」

「レイくんに失礼だぞっ」

再びヴァイパーを軽く叩くフォーレ少佐。

「ジャップばかり贖身しやがって……」

「それはレイくんが真面目に働いてくれるからです」

少佐はそう言い切ると、ハンヴィーを停めた丘に向かって歩き出す。

「まあ、一件落着きたいだし、早く帰って夕食にしようか」

「今夜は市場で買ってきた肉だ、大量だぜ」

ボルフの一言にヴァイパーの目が輝く。

「マジで?!」

「ああ、とびつきりうめえステーキ作ってやるよ」

「よっしゃあ、ボルフ大好き！」

おんぶしてもらうように思いつきりボルフに飛びつくヴァイパー。

「もう、甘やかしすぎよ、ボルフ」

「いいじゃねえか別に。腹は減るもんだろ」

あまりにも家庭的なその三人の姿はとても軍の分隊とは思えなかった。まさに少佐の言っていた『家族』であろう。

「ところで、ボルフさん……」

「おお、どうしたレイ」

「何の肉なんですか？」

レイの質問にボルフは立ち止まり、首をかしげる。

「さあな、安かったぜ」

05 穴に住まう家族

基地と言う名の酒場へと戻ったフォーレ分隊は早速夕食の準備に取り掛かった。

とは言っても基本的に料理はボルフ担当らしく、グリルを取り出して肉を焼きながら野菜を切ってサラダを作ったりとテキパキ働くなか、レイと少佐とヴァイパーは四人分の席があるテーブルに向かって座っていた。

「料理はいつもボルフさんがやるんですか？」

レイはテーブルに座ったまま料理に精を出すボルフを見つめながら言う。

「そうね、ボルフって体格からして豪快そうだけど、この分隊のなかで一番繊細で世話焼きさんだから。家事とかも殆どやってくれるし、彼がいなかったらこの家は滅茶苦茶よ」

「フォーレ少佐は料理しないんですか？」

すると少佐は恥ずかしそうな顔をしながら頭を掻く。

「私がやるとバイオハザードになっちゃうから……」

どうやって食材から生物学的危害が生み出せるかレイは気になったが、あえて追求しない事にした。

「レイくんってどこ出身なの？」

「ロスの近くです」

「あつ、そうなんだ。お姉さんは東海岸育ちだからね、そっちは全然知らないな」

このまま会話を続けようとレイはヴァイパーに尋ねた。

「ヴァイパーは？」

すると急にヴァイパーは不機嫌な顔になる。

「オレは……関係ねえよ」

「ボルフはカンザス出身よ。穴が出来た時に居合わせてたんだって」
すぐさま話題を逸らすフォーレ少佐の行為からして、どうやらそ

れはいけない質問だとレイは悟った。

そこで今日の出来事から疑問に思っていた事が一つ――

「所でフォーレ少佐、超能力者っているんですか？」

「えっ」

キョトンとした表情を見せる少佐。やはり馬鹿馬鹿しい質問だったかとレイは後悔していると、フォーレ少佐は真面目な表情でレイに尋ねる。

「今日の敵の中に……変な力を使う人がいたの？」

「えっ、は、はい――一応」

テスト・サブジェクト

「《実験台》の生き残りね。成功作がいるなんて知らなかったけど」
「なんの《実験台》なんですか？」

「一時的に流行った理論に基づいた実験の被検体よ」

レイはいまいち話の筋が理解出来なかった。

「どうしてこの穴が突然開いたかに関しては誰も納得の行く答えを出せていないでしょ」

少佐の言う通り、いかなる地質学や地理学を持っても原因が証明されていない。レイが地上にいた頃は穴の出現から何十年も経つと言うのに、頻繁にテレビなどで議論の対象となっていた。

「そのうち一般に公開されていない説で一部からかなりの支持を集めてたものがあつたのよ。暗黒物質衝突説って言うんだけどね」

「何だか胡散臭い名前ですね」

「所が内容もかなりぶっ飛んでるのよ。用は穴を作つたのは現在の人類には観測する方法のない理解不能の性質をもった暗黒物質ダークマターが地球に衝突し、それが作つたクレーターが現在のアビスだつて。そうだと何で地面だけつぶれてそこにいた人たちは大丈夫かとか、どうしてアビスの外は何の被害もないのかって言う謎に説明はつくですよ」

――それは説明がつくとは言わないんじゃない……

「現にその証明としてアビスは妙な電波を放っているのよ。これは観測できるもので、人間の脳に影響を及ぼすと言う事も証明されて

る。現にレイくんだってこっちに来てから少し自分が変わったと思うでしょ」

よく考えてみた結果、それはそうかもしれないとレイは思った。いくら武道の経験があるとは言え、いきなり実戦で恐怖がなくなりあのような力を発揮するのは普通には考えられない。

「軍はそれを利用できないかって考えて、一番電波の強い場所、すなわちアビスの中心地である種の実験を始めたの。超自然的な力を持つ兵士を作る為に」

「まるで下手なSFみたいですね」
フォーレ少佐は笑顔を見せた。

「でしょ、で、本当にフィクションだったみたいなの。実験は口く大な成果も出せず金だけ食ったから政府に打ち切られちゃった訳。まあ、レイくんが超能力者にあったって言うなら少しは成功したのかもしれないけど」

「でも、どうしてフォーレ少佐がそんな事を……」

「オレが姉さんに教えたからだよ」

それならどうしてヴァイパーが知っているかレイは尋ねようと思ったが、丁度その時に四人分の夕食をトレイに乗せたボルフが姿を現した。

「出来たぜ」

ボルフはサラダの盛られたステーキらしきものとコーラの入ったグラスを食器と共にテーブルに置くと、自らも座る。

「さあ、食べ食べ」

が、少佐は全員を止め、立ち上がる。

「その前に初陣でありながら大活躍のレイくん乾杯よ！」

「そうだったな」「へいへい」

四人は立ち上がり、グラスを重ねる。

「これからもよろしくね、レイくん」

フォーレ少佐の笑顔に何かと照れてしまい、レイは「は、はい」と頷きながら再び席に着いた。

そして四人は食べたす。本来なら得体の知れない肉など食べようとは思わないレイだが、今日は二回もの激しい戦闘によって消耗しており、屠るように食べ物を口に押し込み始めた。

「へえ、腹減ってるじゃんか」

「いほがひいいひにひだつたのへ」

レイは思わず口がいつぱいそのまま答えてしまう。それを耳にしたボルフは何かと納得したように頷く。

「なるほど、俺はフレッセの胸なんぞ触った事ないから分からないけどな」

「しょんあほとひつてまへん！」

「あら、レイくんったら見かけによらず大胆ね」

完全に誤解されているようだ。

「ちがつ……」

盛大に咽るレイ。そんな彼の背中を撫でながら、フォーレ大佐は言う。

「冗談よっ。もう、可愛いんだから」

いきなりレイの頭を胸元に押し込み抱きしめる少佐。

むぐぐ、と必死に息をしようとする中、ヴァイパーの悪態が聞こえる。

「バツカじゃねえの、ガキみたいに扱われて」

「あ、もしかしてヴァイパーくん焼いてる？」

「うつせえよ、誰が姉さん相手に嫉妬するか！」

フォーレ少佐はレイを解放すると、向かい側に座るヴァイパーに手を伸ばす。

「ほら、ヴァイパーくんも抱きしめて欲しいんでしょ」

「ん、んなことねえよ！」

「そうなんだ」

「後で……」

俯きながらぶつぶつと呟くヴァイパー。結局抱きしめて欲しかったのか。

「それよりせっかく新入りも馴染んできた訳だし、夕食終わったら映画でも見ようぜ」

ボルフの提案にヴァイパーは「賛成！」と喋り出る。自分の発言に気まづくなつたので話題を変える為だろう。

「とは言つても、うちはランボー2・3・4しかないけどね。何故かこの二人は何度見ても飽きないみたいだけど」

「姉さんは分かつてねえな。ランボーは素で見るときと酔つ払つて見るときとハイな時に見るので三度まったく違う作品が味わえるんだぜ」

——それはどの映画でも言える気がするんだけど。

レイが苦笑していると、隣のボルフが頷く。

「ああ、幻覚剤^{シュルム}食つたあと見たランボーは凄かったよな、急にランボーがゴキブリになつちまつて」

するとヴァイパーがボルフを叩いた。

「なに言つてんだよ、あれはトウモロコシになつたんだろ」

「おまつ、どうやってゴキブリとトウモロコシを間違えるんだよ」

「てめえが間違えてるんだろ、頭おかしいんじゃないの？」

二人とも幻覚剤やつた時点で頭おかしくなつてたんじゃ……とレイが思っている間にも、フォーレ少佐はヴァイパーに厳しい視線を送っていた。

「初めてよ、その話。いつそんな危ないものに手を出してたのよ」

「あつ、いや姉さん、違うんだ。ボルフがそれっぽいキノコ見つけたから一緒に食おうぜって——」

「ボルフ」

視線がヴァイパーからボルフへと動く。

「俺はただの干しキノコだと思つて買つて帰ってきたんだ。いやあ、まさかあんなドラッグだったとは……」

「本当に？」

「そついやもう何日もサミーを見てないな、どこにいったんだか」「話題をそらさない！」

結局食後に四人はランボ―2を見て、長すぎるレイのアビスでの初日は終わりを迎えた。

00 穴は男女問わず

目を覚ますと、レイはベッドの上で寝ていた。記憶に残っているのは昨夜ランボーを見ていた時まで。

そうするとランボーを見ている間に寝てしまったと言う事になる訳だが、それならば何故ソファアの上でなくベッドで横たわっているのか分からなかった。

とりあえず顔を横に転がすと、そこにはフォーレ少佐の顔が。

「おはよつ、ねぼすけさん」

そつとレイの額にキスする少佐。

「しょ、少佐……何で？」

何故か同じベッドにいるフォーレ少佐の存在に一瞬で体が硬直する。

「何でつて、昨日の事覚えてないの？」

「えっ、昨夜はランボーを見て……」

「それからレイくんが私をここまで連れてきて二人で一晩中——」

「やってません！ 絶対にフォーレ少佐には手を出してません。出せるはずありません。僕は童貞です。童貞なんです！」

高鳴る心臓を抑えようとしながら必死に己を弁護するレイだが、少佐は色気づいた表情でシーツの下でレイの右膝に触れると、ゆっくりと手を上に持っていく。

「覚えがないんです！」

「そう、私はレイくんの……覚えてるのにな」

フォーレ少佐の細長い指がレイの太もを上り続ける……その先にあるものは。

レイが大人になる覚悟を決めた瞬間、少佐の両手はレイの頭をひつくるめ、胸に押し付けた。

「な〜んてね、本当は寝ちゃったレイくんをボルフがこの部屋まで担いできただけ。レイくんったら必死になっちゃて可愛いっ」

ギョツ、とさらに力強くレイを抱きしめるフォーレ少佐。

「だ、だったらどうして少佐は――」

「せっかくだから面白い起こし方にチャレンジしてみようかな、って思ったまですよ」

「面白くありませんよ……」

レイがそう口走ると、少佐は彼を手放し、ベッドから元気よく飛び出る。

「でも、嬉しかったでしょ」

否定しにくい一言。

「ともかく、シャワーは左に出た廊下の突き当たりにあるから、好きに使ってね」

フォーレ少佐はウィンクし、そう言い残すと部屋を去っていた。

昨日の汗を落とすためにもレイはお言葉に甘える事にし、黒こげになった軍用サックからとりあえずまだ着れそうな服と下着を取り出すと、廊下の突き当たりにある扉まで歩いた。扉は半分開いており、湯気が漏れている。

レイは立ち止まった。

ここでノックをせずに扉を開けてしまったら裸の誰かに出くわすと言う展開になるだろう。とりあえずフォーレ少佐と言う事はあるえないので残りは男……つまり大丈夫なはず。

だが、そこでレイはもう一人家出中のサミーと言う女性がいる事を思い出した。仮に彼女が帰ってきていたら……

念には念を入れると言う事で、レイは扉をノックする。

「シャワー終わってんだから勝手に入って来いよ」

聞こえてきたのはヴァイパーの声。

――よかった、大変な事にはならずに済む。

そう思いながら扉を開けた瞬間、全裸のままバスタオルで髪を乾かすヴァイパーが目に入った。

問題はそれではない、ヴァイパーの裸体である。

少しだけふくらみが窺える胸に、明るいピンクの乳房。股の間に

は全ての男性に備わっているはずのソーセージミートボールおになりさんが欠けている。すなわち……

——女の子？

いや、出会ったときに少女かもしれないと考えていなかった訳ではない。だが、いつのまにかレイは勝手にヴァイパーが男だと確信してしまっていたのだ。見事に間違っていたようだが。

そしてレイとヴァイパーの視線が合わさる。

「この……変態ジャップがああああ！！」

ヴァイパーは顔を真っ赤にしながらレイに向かって突撃した。

「ど、どうした？！」

ボルフが慌ててバスルームに飛び込んできた時には、レイは全裸のヴァイパーによってキャメルクラッチにされており、必死にタツプしていた。

「は、入っていいって言ったのはヴァイパーなのに」

レイの必死の弁護も通らず、ひたすらキャメルクラッチは強く決まる。

「うるせえ、てめえがいる事を忘れてたんだよ！ ボルフか姉さんだと思ってたんだよ！」

涙目で怒鳴るヴァイパー。自分を殺そうとするよりとつと服を着たほうが早いのではないかとレイは思わずにいらなかったが、下手につっこむとさらに逆上しそうなので何も言わずにひたすらタツプした。

——でも、ボルフさんには裸を見られてもいいんだ。

「つたく、朝っぱらから裸でプロレスとは元気だな」

「ちげえんだよ、ボルフ！ こいつがオレの裸を！」

「俺だつて昔はしょちゅう見てただろ」

「お前は育て親だから違うんだよ！」

背中を裂かれそうな激痛に耐えながらもレイはなるほど、と納得する。

結果的にボルフの介入でレイは真っ二つにされるのを免れ、無事

シャワーを浴びる事が出来た。

シャワーを終えて階段を下っていくと、そこにはテーブルに座るフォーレ少佐とヴァイパー、そして奥のキッチンで朝食を作るボルフ。

——本当に家庭的だな、この分隊は。

そう思いながらテーブルに向かうと、顔を赤らめたヴァイパーに思いつきコップを投げつけられた。

レイは間一髪のところコップをキャッチし、カウンターに置く。「こっちくんじゃねえ変態ペドジャップ！」

どうやらまだ裸を見られた事を引きずっているようだ。

「だからあれは不可抗力……」

「そんな事で覗き見が許されると——」

「まあまあ、ヴァイパーくん。見られて減るもんじゃないだから。乙女心を傷つけられたのは許してあげて」

フォーレ少佐の言葉が気に食わなかったのか、ヴァイパーは食いつくように彼女に言った。

「う、うるせえ！」

そして少佐から目を背けて——

「乙女心なんて夕日の向こうに捨てちまったよ。俺は兵士なんだぜ」
何かとカッコつけたセリフを吐く。

「じゃあレイくん裸に見られても問題はないわよね」

「いやっ……それは……」

ヴァイパーが反論できなくなった隙にレイは着席した。

「姉さんはコイツに裸を見られてもいいのかよ？」

「私の裸見たい？ レイくん」

「卑怯な質問です、少佐」

「答えになってないよ」 見たいのかな？」

「またもや少佐に弄ばれるレイは、黙り込む以外の対処法を思いつけなかった。」

「ほいつ」

目玉焼きとトーストが乗った皿を四つ運んできたボルフが会話に割り込む。そのナイスタイミングに救われるのはすでに今日二度目だった。

ボルフも席につき、目玉焼きをナイフで切りながらフォーレ少佐に尋ねる。

「所でフレッセ、さっきの通信は何だったんだ？」

「うん、ストラット大佐からの召集命令よ。フォートフッドに來いって」

「昨日の件か」

フォーレ少佐は目玉焼きの黄身をフォークで突っついて黄色い中身を溢れさせながら答えた。

「ここ数日で攻撃を受けたのがバレーミルズだけじゃなかったみたい。全四箇所、どれも第962歩兵旅団の管轄だけだね」

「どうなってたんだかな」

フォーレ大佐は目玉焼きから摂取した黄身をナイフですくい上げてトーストに塗り始める。

「これくらい大規模な反乱は初めてだったんですか？」

レイの質問に、黄身の乗ったトーストを食べながら頷いた。

「そうね、そもそも連中の装備が不思議なの。野党だって基本的な武装は刃物と鈍器、そして民間人向けの拳銃か自作のパイプ銃だし……AKはともかくRPGを持つてる連中になんて滅多に出くわさないわ」

確かに、地上ならアメリカ力でも闇市を通して手に入れられない事はないだろうが、アビスは世界から孤立している。おまけに周囲は地上の軍によって全方位で守られている故に密輸など不可能に近い。つまりアビスにある銃器は元々穴が開く以前から存在したもののみと考えられる。

「仮に簡単にあんな武器が手に入るなら、とつくにアビスの軍はやられてるわよ」

フォーレ少佐の言う通りであった。そもそもバレーミルズなど何

の戦略的価値もない場所に武器庫を作るほど無能な軍なので、仮に野党でも自動火器を持っていたらアビスの僅かな秩序は一日でおじやんだろう。

「じゃあ、昨日僕達を襲った野党も――」

「多分、武器庫を襲った連中と関わってるでしょうね」

「どうやらレイは最悪のタイミングでアビスに来てしまったようだ。これから反乱が起ころうとしているなど。」

「トーストを食べ終わると、フォーレ少佐は立ち上がる。」

「と言う訳で今日はフォートフッドに行くからみんな食べ終わった準備してね」

「全員で行くのか？」

「そう言う事、出来るだけ兵力はつれて来いだって」

「フォーレ少佐はそう言い残して階段を上っていった。どうやら少佐は卵の白身は好みじゃないらしく、ボルフはため息を吐きながら自分の皿に黄身の無くなった目玉焼きを移す。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7630v/>

ファイアインザホール ～穴《アビス》では日常茶飯事だぜ！～

2011年11月26日18時57分発行